

2015 年度統計力学 II 宿題 11 (7 月 2 日出題、7 月 9 日提出) 解答

担当 吉森 明

[問題 1.] (a) 周期的な境界条件で光子の $D(\omega)$ と E を求めなさい。

(b) 異核 2 原子分子 1 個の分配関数が $Z_1 = Z_G j_{rot} Z_S$ の時、1 分子あたりの比熱が $C_V = C_{V,G} + C_{V,rot} + C_{V,S}$ となることを示しなさい。添字の G, rot, S は重心、回転、スピンを表す。

(c) 分子の慣性モーメントが I とすると、 $C_{V,rot}$ について低温の極限で温度 T の依存性を表す式を求めなさい。 $x \ll 1$ で $\ln(1+x) \simeq x$ を使い、 $\ell > 1$ は無視して良い。

[解答] (実際の解答にはここまで計算を丁寧に書かなくて良い。)

(a) $D(\omega)$ の計算は、宿題 4 とほぼ同じように計算できる。波数空間を考えるのは他の普通の粒子と同じで、光の状態を波数空間の 1 点に対応させる。ただし、 $g = 2$ なので、波数空間の 1 点は 2 個の状態と対応している。

0 から ω にある状態の数 $N(\omega)$ は、波数空間の球の中に入っている点の数から得られる。半径 ω/c の体積を点の間隔の 3 乗で割れば、 $N(\omega)$ を計算できる。点の間隔は $2\pi/L$ だから

$$N(\omega) = \frac{4\pi}{3} \left(\frac{\omega}{c}\right)^3 \left(\frac{V}{8\pi^3}\right) \times 2 \quad (1)$$

したがって、

$$D(\omega) = \frac{dN(\omega)}{d\omega} = \frac{8\pi}{c^3} \omega^2 \left(\frac{V}{8\pi^3}\right) = \frac{V}{\pi^2 c^3} \omega^2 \quad (2)$$

ただし、 $\omega < 0$ で $D(\omega) = 0$ となる。

E は、

$$E = \int_{-\infty}^{\infty} b(\hbar\omega) \hbar\omega D(\omega) d\omega \quad (3)$$

ここで、 $b(\hbar\omega)$ はボース分布に $\varepsilon = \hbar\omega$ を入れたもの。 $b(\hbar\omega)$ と $D(\omega)$ の具体的な形を代入すると、

$$E = \int_0^{\infty} \frac{\hbar\omega}{\exp[\hbar\omega/k_B T] - 1} \frac{V\omega^2}{\pi^2 c^3} d\omega \quad (4)$$

$\hbar\omega/k_B T = x$ として変数変換すると、

$$= \frac{V(k_B T)^4}{\pi^2 c^3 \hbar^3} \int_0^\infty \frac{x^3 dx}{\exp[x] - 1} \quad (5)$$

ここで、

$$I = \int_0^\infty \frac{x^3 dx}{\exp[x] - 1} \quad (6)$$

とおけば、

$$E = \frac{V(k_B T)^4}{\pi^2 c^3 \hbar^3} I \quad (7)$$

と答えが求まる。 I は、物理量によらない定数で、長岡^{*1}P278(A11) 式によれば、 $\pi^4/15$ の値になる。

(b) エネルギーと分配関数は次の関係式で結ばれる (統計力学 I 参照: 長岡 P74(3.17) 式、補習ノート^{*2}P10(21) 式)。

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_1 \quad (8)$$

ここで、 $\beta = 1/(k_B T)$ とした。 $Z_1 = Z_G j_{rot} Z_S$ だから

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln(Z_G j_{rot} Z_S) \quad (9)$$

対数の公式から、

$$= -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_G - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln j_{rot} - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_S \quad (10)$$

$\epsilon_G \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_G$ 、 $\epsilon_{rot} \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln j_{rot}$ 、 $\epsilon_S \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_S$ とすると、

$$= \epsilon_G + \epsilon_{rot} + \epsilon_S \quad (11)$$

^{*1} 岩波基礎物理学シリーズ 7 「統計力学」、長岡洋介 著、岩波書店

^{*2} <http://www.cmt.phys.kyushu-u.ac.jp/~A.Yoshimori/hoshu15.pdf>

これは、エネルギーが3つの自由度の寄与の和で書ける事を表している。

一方、比熱は、(長岡 P57(2.87) 式、補習ノート P9(13) 式)

$$C_v = \left(\frac{\partial E}{\partial T} \right)_V \quad (12)$$

(11) 式を代入すると、

$$= \frac{\partial \epsilon_G}{\partial T} + \frac{\partial \epsilon_{rot}}{\partial T} + \frac{\partial \epsilon_S}{\partial T} \quad (13)$$

$C_{VG} = \partial \epsilon_G / \partial T$ 、 $C_{Vrot} = \partial \epsilon_{rot} / \partial T$ 、 $C_{VS} = \partial \epsilon_S / \partial T$ とすれば、答えが示せる。

② 回転の分配関数は、授業で説明した通り、 $\Theta = \hbar^2 / (2Ik_B)$ とすると、

$$j_{rot}(T) = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp[-l(l+1) \frac{\Theta}{T}] \quad (14)$$

ここで、 $T \ll \Theta$ を考えると、 l の大きい項は無視できる (問題 2 参照)。

$l > 1$ を無視すると、

$$j_{rot}(T) = 1 + 3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] \quad (15)$$

(8) 式から、

$$\epsilon_{rot} = - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln j(T) \quad (16)$$

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln \left(1 + 3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] \right) \quad (17)$$

$x \ll 1$ の時の公式 $\ln(1+x) = x + \dots$ から、

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} \left(3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] + \dots \right) \quad (18)$$

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} (3 \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots) \quad (19)$$

$$= 6k_B \Theta \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots \quad (20)$$

(12) 式から、

$$C_{V,rot} = \frac{\partial \epsilon_{rot}}{\partial T} \quad (21)$$

$$= \frac{\partial}{\partial T} (6k_B \Theta \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots) \quad (22)$$

$$= \frac{\partial}{\partial T} \left(6k_B \Theta \exp\left[-2\frac{\Theta}{T}\right] + \dots \right) \quad (23)$$

$$= 6k_B \Theta \frac{2\Theta}{T^2} e^{-2\Theta/T} + \dots \quad (24)$$

[問題 2.] 異核 2 原子分子の j_{rot} について、低温で大きい l は無視できることを示せ。

[解答] (14) 式で $T \ll \Theta$ を考える。

$$\frac{\Theta}{T} \gg 1 \text{ だから、} X \equiv \exp\left[-\frac{\Theta}{T}\right] \text{ は、小さい。つまり、} X \ll 1 \quad (25)$$

$$\exp\left[-l(l+1)\frac{\Theta}{T}\right] = X^{l(l+1)} \text{ で、今、} X \ll 1 \text{ だから、} \quad (26)$$

$$X^{l(l+1)} \text{ は、} \boxed{l \text{ が大きいほど小さい。}} \quad (27)$$

つまり、 $T \ll \Theta$ の時は、 l の大きい項は無視できる。